

● お城見学会

令和7年6月6日、梅雨入り前の東の間の晴れた日、一行32名は土佐路を訪れました。

最初に訪れた南国市の岡豊（おかう）城は、戦国時代の武将、長宗我部氏の居城跡であり、標高97Mの岡豊山は東西に長い孤立丘陵に構築された土佐の中世城郭を代表する城跡のこと。ここを本拠に長宗我部元親は土佐を統一し、天正16（1588）年大高坂城（現、高知城）に移転するまでその居城として機能しました。城の縄張りは、山頂部を主郭とし、二の段から四の段までの階段式曲輪が構えられ、さらに西には伝廻跡曲輪と南に伝家老屋敷跡曲輪の二か所の副郭を持つ構造で、斜面には横堀と土塁、堅堀群、切岸など堅固な守りを見ることができました。この遺跡は、出土した小さな瓦片から建物の年代が確認できるとして、平成20（2008）年7月に国指定史跡になったとのことでした。

この城跡の麓には、高知県立歴史民俗資料館があり、長曾我部氏の攻防をたどる展示を始め、土佐の民俗、祭礼、産業などの関する資料があり、とりわけ、私の趣味である郷土玩具、鯨舟、鯨車、坊さんかんざし、女（ひめ）だるま、香泉人形など興味深く鑑賞しました。昼食は、ひろめ市場で各自藁焼きのカツオのたたきなどお目当ての郷土料理を楽しみました。



● 高松城の復元活動にご賛同頂いている法人

（公財）松平公益会、（宗）石清尾八幡神社、高松市茶華道協会、高松市大工町自治会、（公）高松青年会議所、香川県造園事業協同組合（玉藻公園指定管理者）、高松丸亀町商店街振興組合、高松市観光ボランティアガイド協会、法華宗本覚寺、株香川経済レポート社、香川証券株、株喜代美山荘（花樹海）、ネットトヨタ高松株、株二蝶、高松帝酸株、株香西工務店、高松商運株、久米加株、株森造園、株ネクサス、高尾石材株、四国興業株、株アムロン、清水建設株四国支店、株安藤・間四国支店、後藤設備工業株、株かねすえ、株オーディオサミット、（有）角田米穀店、株EBiSU、西日本土木株、日本舞踊藤間流「勘雅智枝会」、小手毬、株朝日段ボール、株フェアリーテイル、ハウス美装工業株、北浜alley株、大樹生命保険株高松支社、株ツゲ炭酸工業、Nambaホールディングス株（順不同）
【協賛団体】 高松商工会議所、高松観光コンベンションビューロー、高松玉藻ライオンズクラブ、香川経済同友会（順不同）

高松城の復元を進める市民の会

（事務局）〒760-0029 高松市丸亀町13番地2（高松丸亀町商店街振興組合内）

TEL: 087-823-0001 FAX: 087-823-0730

ホームページ <http://www.takamatsujyo.jp/> 高松城の復元 検索



高松城の復元を進める市民の会

第14号

高松城復元かわら版

令和8年1月発行

● 香川県民の日と中野武當

池田知事は、平成8年から12月3日を香川県民の日に制定することを表明しました。

この日は、香川県が明治21年に愛媛県から分離独立した日に由来します。



この独立に大きく貢献したのが中野武當です。明治期香川県は、徳島県、愛媛県への吸収合併の道を歩みます。郷土の存続を強く願う有志らが国へ分離独立に向け請願・陳情を繰り返しますが願い叶わず、明治21年に当時愛媛県議会議長で中央政府に太い人脈を持っていた中野武當が、県議会を欠席して大隈重信や松方正義らに働きかけを続け、分県運動はようやく実を結びます。

こうした中野武當の働きかけは水面下で行わ

れ、また、人を支えても表に出ないという讃岐人気質も影響しその功績は歴史に深く刻まれることはありませんでした。

平成30年、中野武當没後100周年を迎えるシンポジウムが開かれたのを機に中野武當の顕彰活動が始まり、そうした功績が明るみに出ることになります。

これには、地道に中野武當を研究してきた石井裕晶先生らの研究成果が礎になっています。

また、県の広報誌で浜田前香川県知事が「香川県独立の父 中野武當」としてその功績を称えたことで、武當の人間像が明確にされることになりました。

令和6年銅像の建立により顕彰事業は終わりを告げましたが、県民の日の制定を機に、郷土を愛した中野武當の思いや功績に再び注目が集まることが期待されます。

（公財）松平公益会事務局長（稻毛 清和）

● 理事長 新年ご挨拶

新年あけましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、清々しい新年を迎えたこととお喜び申し上げます。振り返ってみると、昨年は記録的な猛暑の夏となり、日本いや世界の気候が大きく変動してきていることが日常生活において痛いほど思い知られた夏でした。

さて、私たちの活動の目標である天守閣の復元につきましては、去る5月24日の通常総会において、高松市文化財課 課長補佐 大嶋和則氏から最新情報を聞きしました。お話では、令和7年度は文化庁の指導により、令和6年度に引き続き資料収集（天守内部の意匠、構造、使用方法など）に努めているほか、遺構の保護と建物の安全性確保の技術的検討（地盤強度、耐荷重、基礎構造など）を進めているとのことで

した。今後は、天守台石垣の安定性評価において問題なし、とされれば来年度以降、天守台のボーリング調査の予定である、とのことでした。いずれにいたしましても、現在行われている技術的調査に期限はなく、今後どのくらいの時間（年数）がかかるのかは未定でありますので、私たちの活動も息長く継続していく他ないように感じました。

一日も早く天守再現を願う私たちの活動もこの現実を受け止めざるを得ませんが、新年度の総会では今後の活動の進め方を議論したいと考えているところであります。

会員各位には、これからも最新情報を提供してまいりますので、ご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。

（古川 康造）

●「蔵屋敷の蔵と産物－高松藩蔵屋敷の場合」を聴講して

1. 大坂蔵屋敷は

近世、蔵屋敷は、諸大名が貨幣入手の必要から、領内の米穀その他の物産を貯蔵販売するために、大坂や江戸などに設けた屋敷のことであり、倉庫と販売事務所を兼ねていました。高松藩の大坂蔵屋敷は、中之島の堂島川と土佐堀川の間に立地していました。この蔵屋敷の南部を2010（平成22）～2021（令和3）年にかけて発掘調査が行われ、その時のお話でした。

高松藩の隣には、久留米藩、広島藩、鳥取藩等があり、それぞれ船入を備えた大藩です。広島藩の蔵屋敷は当時の絵図が残されているそうで、それによると土蔵、御殿、長屋、船人の配置がわかり、また、宮島の厳島神社がまつられていたとのこと。この配置や高松藩に隣接していた徳島藩の配置、また、発掘調査の礎石等を参考に高松藩の推定した配置図も示していただき、多分、金刀比羅宮もお祭りされていたのでは？とのお話もあり、次の展開を楽しみながら聴講が進みました。

2. 発掘調査

現地では18世紀に蔵屋敷が建設され、その遺構からは、土蔵、暗渠、井戸など、また廃棄土壌からは中国産磁器をはじめ肥前、美濃の磁器、京焼系陶器、焼塙壺、土人形などが出土したこと。また、19世紀初頭には蔵が立て替えられ、そこからもたくさんの陶磁器が出土。19世紀中葉の蔵屋敷の役割が終焉する時期になると、磁器、陶器、源内焼をはじめ各地の焼き物類、土人形、陶製薬研、骨製竿、全国的にもまれな角筆などが出でたとのこと。さらに、国元とのつながりのわかる三つ葉葵文の鬼瓦や理平焼などが出土。興味深かったのは、アカニシ貝がたくさん捨てられていてほかの藩跡にはない特徴であること。これは郷里の味を楽しむだけでなく、他藩との交流の際にも食したのではないか？とも推察され、松本先生自らもアカニシ貝を買って食された由。さらに、普段のくらしに使う燈明皿や髪飾り、櫛、油壺や紅皿などの化粧道具はじめ、陶製の小判、寛永通宝の指し銭などの玩具



講師：松本百合子先生
(大阪歴史博物館 学芸課長)

類もあり、当時そこに暮らしていた人々の生活の息吹を感じられる大変面白いお話を伺いました。

3. 砂糖のお話

讃岐三白のうち砂糖は、高松藩において誇るべき産業の一つ。8代将軍徳川吉宗が全国に砂糖の国産化を奨励、5代藩主松平頼恭は製糖・製塩事業に力を入れました。砂糖造りにまつわる人物として、池田玄丈や向山周慶、平賀源内などの名前はお聞きしたことがありますが、それを大坂蔵屋敷で売りさばいていたお話は初めてお聞きすることでした。高松藩は、文政年間（1818～1830）には砂糖を蔵物として米・塩・綿とともに蔵屋敷に運び、販売。この頃大坂に運ばれた白砂糖のうち讃岐産が54%も占めていたそうです。天保6年（1835）には木津川岸の千代橋付近に大坂砂糖会所を設立。讃岐では全ての砂糖を統制し砂糖組船でここに運び売りさばきました。そして、砂糖取引の最盛期には、「樽一杯の砂糖が樽一杯の錢」と言われたという。錢とは“銀”でした。当時、国産砂糖の約3割が高松藩製、白砂糖は高松藩の独占状態（約7割）であったというから凄いなあ、と思いました。

4. おわりに

大坂蔵屋敷も明治になり終焉を迎えることになりましたが、この蔵屋敷が大坂の繁栄をもたらし、また蔵屋敷の交流で得られた文化や情報は国元にもたらされ、高松の発展にも大きく寄与したのだと思うと歴史の流れというものに感動した講演会でした。大変貴重なお話ありがとうございました。（南條友香理）

●「海の大名－高松藩蔵屋敷跡の発掘調査から」を聴講して

1. 最初に

今年の秋の講演会は、高松藩が大坂に構えていた蔵屋敷がテーマでした。

内容は、蔵屋敷の実態を把握するべく発掘調査した結果についてのものであり、その中に、高松藩が備えていた船入（船着き場、港）調査の報告が入っていました。私自身の職業と縁がない訳でも無く、江戸時代の構造はどうだったのか等、興味もあって受講しました。



講師：南秀雄先生
(公財)古代学協会 客員研究員
立命館大学 非常勤講師

のかなど、これも色々と思いが巡りました。

又、西側奥に等間隔で設置されていた7本の船係留用杭が確認されており、一番奥の杭以外の6本の杭には、もやい網の摩擦痕が顕著に残っていたようで、嘉永6年（1853）に大坂蔵屋敷が所有した保有船（御座船2隻等6隻）の記録と一致しており、このことは当時の記録と発掘調査の結果が合致していたもので、発掘調査の意義からも、何かわくわくするものを感じながら、当時の船の係留風景が目に浮かびました。

4. 再活用で評価された高松藩大坂蔵屋敷の船入

各藩の蔵屋敷は、廢藩置県によって大阪府に没収されたとのことですが、高松藩の船入は、明治時代に入って、なお改造の上で近代産業（海運業、造船業）育成のために再活用されたようです。それは、構造物として技術的に優れていたことを示しており、さすがに水城を持つ高松藩所以のことだと思います。

5. お礼

今回の講演会では、高松藩の大坂蔵屋敷が、中之島の最も広い部分に位置し、更に蔵屋敷としては稀有な船入を備えていたこと。更に、船入の雁木や護岸などに、高松藩独自の優れた築港技術が確認されたことなど、初めて聞くことばかりで、大いに知見を広げるものとなりました。有難うございました。

（川田通）